

# 『源氏物語』における形容詞ウ音便の使用状況について

市来 ちさ

—

藤井高尚の著書『消息文例』に「音便の詞の事」という章があり、次のような説明がある。

(三) さいつ頃、いみじう、などいふたぐひの音便の詞、中むかしのもの語ぶみには、あまたみゆる中に、せうそこ文のことばには、ことにおほくぞありける、そはいかにといふに、そのかみの人のものいひぶりにて、せうそこ文は、そのものいひやる詞を、もじにかきたるものなればなり、(後略)

平安時代の物語文には音便化された語が数多くみられるとあるが、高尚はその理由を「音便形は当時の人々の言葉遣いであって、消息文はその話し言葉を文字に書いた

ものであるから(音便が多い)」としている。

では、物語中の文章を地の文・会話文・消息文・心中文の別に分類・比較した場合、どのような部分にどれくらいの比率で音便形がみられ、そしてその中に何らかの傾向を見出すことが出来るのだろうか。また作者が執筆上の表現方法として、意識的に音便の使用を企図しているとみる事が出来るだろうか。

高尚の説にしたがえば、会話文に含まれる音便形の用例数が一番多く、続いて話し言葉を文字にした消息文、最後に地の文の順になると予想されるがはたしてどうであらうか。

音便現象を考えるにあたって、重要なこととして資料の検討の問題がある。資料に必要な条件は、その本文がどれだけ原本に忠実であるかという質の面と、多くの用例を含むだけの量があるかという量の面との二つである。

さて、中古の文献のうちで、伝統的な表現を重んじる和歌では音便形が用いられることはない。これに対して物語・日記・随筆などの散文和文資料には数多くみられるが、これらの作品は当時の言語生活を反映した部分が多いからであろうと思われる。

右の散文和文資料のうちで、『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』『枕草子』『更級日記』について、江口正弘氏はこれらの作品に用いられている四段活用形を各活用形別にし、さらに音便形の異なり語数と延べ語数を調査された。動詞の音便形は連用形に生じるものであるから、氏の調査結果を要約すると結局次表のようになる(音便率の求め方は、音便形の延べ語数を音便形の延べ語数と非音便形の延べ語数を足した数字で割り、百をかけたものである)。

活用形	延べ語数			異なり語数		
	音便形数	右のうちの連用形数(非音便形)	動詞全数	音便形数	右のうちの連用形数(非音便形)	動詞全数
竹取	4	611	1,341	2	200	299
土佐	4	237	764	3	109	197
伊勢	13	681	1,380	4	197	287
大和	43	1,786	3,036	6	343	428
源氏	506	22,399	48,621	103	2,458	3,211
枕	28	3,049	6,408	15	837	1,103
更級	17	631	1,345	14	261	401

この表によると、『竹取物語』『枕草子』の音便率は1・0%以下と非常に低い数値であるのに対して、『大和物語』『源氏物語』『更級日記』は2・5%前後であること

がわかる。  
次に北原保雄氏による形容詞連用形のウ音便率の調査をみる。

音便率(%)	連用形	音便形	
12.2	131	16	竹取物語
40.8	710	290	蜻蛉日記
28.8	10,478	3,018	源氏物語
35.0	300	105	紫式部日記
54.2	1,391	754	枕草子
41.3	196	81	和泉式部日記
29.1	333	97	更級日記
55.0	1,986	1,092	浜松中納言物語
21.0	324	68	堤中納言物語
15.5	775	120	大和物語
47.6	5,056	2,407	栄花物語

この表は、北原氏がク活用とシク活用を分けて表示されていたものを合計し、音便率を出したものである。先程の動詞の音便率とは異なり、全体的に形容詞連用形においては高い数値を示している。特に『枕草子』『浜松中納言物語』は55・0%前後と極めて高い。この中から

資料に必要な条件である質と量を備えているものを選び、と、『蜻蛉日記』『枕草子』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』については諸本間の異同が甚しく写本も新しいため不安を伴う。また、『和泉式部日記』『更級日記』は質はともかくとして量の面ではやや乏しく、『竹取物語』『紫式部日記』は本文に不安がある。それに対して『源氏物語』は質・量の点で資料とすることが出来そうである。『大和物語』『栄花物語』は別途考えるべき作品であり、これは後日の問題としたい。そこで今回は『源氏物語』について調査・考察することとした。

### 三

『源氏物語』の伝本は、一般に青表紙本系統の諸本、河内本系統の諸本、別本系統の諸本の三つに分けられている。青表紙本は河内本に比して本文をみだりに改めず、伝来のままに尊重する態度をとっている、という通説にしたがって考えるとき、当然青表紙本系統の中で、その原本である定家筆本を資料として用いたいところである。しかし残念ながら定家筆本には花散里・行幸・柏木・早蕨の四帖が残るのみなので、一般的にこれに一番近いとされている大島本によることにした。ただし、同

系統の本の間でも音便形と非音便形との異同は多く、そのことが音便の調査の障害となる恐れがあるので、念のため定家筆本の四帖とそれに相当する大島本とについて音便形の異同を確かめたところ、両者の間にはほとんど相違がないことが判明したので、大島本を信頼して調査することにした。

次に調査する音便の種類についてであるが、ここでは形容詞のウ音便について取り上げることにした。その理由は、『源氏物語』にはイ音便・ウ音便・撥音便があり、促音便はみられない。しかも撥音便は幻の巻の「夕殿に螢とんで」の一例のみで、これは『長恨歌』の一節の朗誦という特殊な例である。また字音語や「あんめり」「なんめり」などという言い方の場合も特殊なものとして除けば、撥音便はここでは問題外となる。要するに、撥音便・促音便は女性の和文には馴染みにくい表現であったのであろう。

さらにイ音便については、動詞連用形・形容詞連体形に現れることが予想されるが、形容詞連体形はその例が少なく（動詞連用形については別の機会に考えたい）、用例が全体にわたって広くみられるものとして、今回は形容詞連用形ウ音便を対象として検討することにした。そしてその結果によってこの音便形がどのような部分に

用いられているか、また作者が明らかに用語選択の意識をもった上で音便を使い分けられているとしたら、その結果はどのように現れているかをみようと試みた。

#### 四

前にも述べたように、作者が明らかに用語選択意識をもった上で音便を使い分けられているとしたら、音便率はその結果をはっきりと現すはずである。音便形の現れ方としては、会話文・消息文などが地の文よりも高率となるのであろうと予想した。また心中文は登場人物の心中を描写するという異質な存在であり、地の文・会話文・消息文とは区別すべきものとして、別項目として扱った。さて、実際に『源氏物語』全巻にわたって形容詞連用形ウ音便の調査を、地の文・会話文・消息文・心中文について行ったところ、結果は次の通りとなった。

巻名		
音便形	地の文	
非音便形		
音便率	会話文	
音便形		
非音便形	消息文	
音便率		
音便形	心中文	
非音便形		
音便率	合計	
音便形		
非音便形		
音便率		

滂 標	明 石	須 磨	花 散 里	賢 木	葵	花 宴	紅 葉 賀	末 摘 花	若 紫	夕 顏	空 蟬	帚 木	桐 壺
62	86	85	4	149	116	28	53	84	101	27	19	5	42
56	80	76	18	110	99	27	83	64	81	158	40	94	50
53	52	53	18	58	54	51	39	57	55	15	32	5	46
15	12	19	2	13	18	4	6	14	54	17	7	10	19
17	18	27	1	8	25	4	14	15	52	70	9	159	17
47	40	41	67	62	42	50	30	48	51	20	44	6	53
0	0	3	0	2	2	0	0	1	3	0	0	0	0
2	3	3	0	7	0	0	0	0	7	0	0	0	0
0	0	50	0	22	100	0	0	100	30	0	0	0	0
6	8	3	1	6	9	2	0	3	1	0	0	0	1
5	8	7	1	4	11	0	0	1	0	4	0	0	2
55	50	30	50	60	45	100	0	75	100	0	0	0	33
83	106	110	7	170	145	34	59	102	159	44	26	15	62
80	109	113	20	129	135	31	97	80	140	232	49	253	69
51	49	49	35	57	52	52	38	56	53	16	35	6	47

野 分	篝 火	常 夏	螢	胡 蝶	初 音	玉 鬢	少 女	朝 顏	薄 雲	松 風	繪 合	閨 屋	蓬 生
11	2	0	2	35	3	20	63	17	33	31	25	7	27
42	7	50	61	33	64	107	103	50	76	29	48	7	47
21	22	0	3	51	4	16	38	25	30	52	34	50	36
7	0	5	1	21	1	17	20	10	15	14	3	1	8
14	2	51	23	27	7	51	35	30	29	17	12	3	15
33	0	9	4	44	13	25	36	25	34	45	20	25	35
0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0
0	0	1	1	1	0	0	1	2	0	1	0	1	0
0	0	0	0	67	0	0	0	0	0	50	0	0	0
0	1	0	0	3	0	0	3	0	4	2	2	0	1
6	0	12	2	1	2	6	13	8	10	0	4	1	7
0	100	0	0	75	0	0	19	0	29	100	33	0	13
18	3	5	3	61	4	37	86	27	52	48	30	8	36
62	9	114	87	62	73	164	152	90	115	47	64	12	69
23	25	4	3	59	5	18	36	23	31	51	32	40	34

句 宮	幻	御 法	夕 霧	鈴 虫	横 笛	柏 木	若 菜 下	若 菜 上	藤 裏 葉	梅 枝	真 木 柱	藤 袴	行 幸
18	28	14	138	23	23	93	8	17	28	33	79	1	45
55	47	70	101	30	43	44	397	296	45	21	68	39	36
25	37	17	56	43	35	68	2	5	38	61	54	3	49
3	11	0	68	11	6	58	6	5	11	9	27	1	19
1	18	7	58	8	17	30	203	174	14	17	23	29	37
75	38	0	54	58	26	66	3	3	44	35	54	3	34
0	0	0	2	0	0	1	0	2	0	0	4	0	3
0	0	0	3	0	1	2	4	12	0	0	4	0	1
0	0	0	40	0	0	33	0	14	0	0	50	0	75
2	2	0	21	0	1	12	2	2	2	0	3	1	3
6	4	4	13	0	4	15	32	27	3	0	3	3	3
25	33	0	62	0	20	44	6	7	40	0	50	25	50
23	41	14	229	34	30	164	16	26	41	42	113	3	70
62	69	81	175	38	65	91	636	509	62	38	98	71	77
27	37	15	57	47	32	64	2	5	40	53	54	4	48

第一 合計部	夢 浮 橋	手 習	蜻 蛉	浮 舟	東 屋	宿 木	早 蕨	総 角	椎 本	橋 姫	竹 河	紅 梅
1323	4	54	40	51	50	6	12	27	48	36	62	17
1969	23	102	125	136	143	310	53	360	84	108	74	24
40	15	35	24	27	26	2	18	6	36	25	46	41
400	4	39	21	18	31	6	2	18	24	14	23	8
872	29	88	70	78	123	19	30	134	42	47	34	13
31	12	31	23	19	20	24	6	12	36	23	40	38
21	0	1	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0
35	3	0	10	18	4	9	1	0	1	3	2	0
38	0	100	0	10	0	0	0	0	0	25	33	0
65	1	11	4	7	5	1	1	3	7	3	5	0
127	2	22	34	29	22	65	4	52	6	14	6	2
34	33	33	11	19	19	2	20	5	54	18	45	0
1809	9	105	65	78	86	13	15	48	79	54	91	25
3003	57	212	239	261	292	403	88	546	133	172	116	39
38	14	33	21	23	23	3	15	8	37	24	44	39

第二部 合計	第三部 合計	五四帖 合計
344	425	2092
1028	1597	4594
25	21	31
165	211	776
515	708	2095
24	23	27
5	5	31
22	44	108
19	10	22
40	50	155
99	264	490
29	16	24
554	691	3054
1664	2613	7287
25	21	30

・他の文・会話文・消息文・心中文などの認定は、旧小学館古典文学全集「源氏物語」全六卷（底本は大島本）による。

・手習いなど文字として書かれた文は消息文扱いをした。

・和歌に含まれる形容詞連用形については、音便形の現れない範囲であるため、数字に入れなかった。

・心中文と地の文との区別は大変微妙であるが、はっきりと心中表現であると区別出来るものについては心中文とし、どちらともいえないものは地の文とした。

## 五

前節の調査によってどのようなことが明らかになったであろうか。

第一に、「源氏物語」全巻を通してみると、地の文・会話文・消息文・心中文の音便率は予想に反してほとんど変わらず、いずれも約30%である。30%という数値がどのような意味をもつかは充分考慮しなければならぬが、形容詞連用形の全数の30%というのは、かなりの高

率で、ウ音便形が相当に一般化していて、格別に新奇さや異和感といったようなものがなく、文章にとけ込んでいるという状態ではないかと考えられる。しかも地の文・会話文・消息文・心中文の間で音便率にほとんど差がみられないのは、形容詞連用形ウ音便に限って言えば、この表現が当初にもった俗語感覚、口語感覚が薄められ、目障りにならないほど文章に調和してきたものとみることは出来ないであろうか。即ち形容詞連用形ウ音便は撥音便や促音便などと違ってかなり文章表現に馴染んでいるのではないかとすればこれは音便の用法の一つの変化といえるのである。

第二に、全巻を通してみた音便率は右のごとくであるが、巻毎にみるとかなりの差異のあることが知られる。音便率の高い巻としては、末摘花56%、賢木57%、胡蝶59%、柏木64%、夕霧57%の五帖が目立ち、特に柏木は大変高率である。逆に音便率の低い巻としては、帚木6%、初音5%、螢3%、常夏4%、藤袴4%、若菜上5%、若菜下2%、宿木3%の八帖があり、若菜下に至っては、六五二例中の十六例にしか音便形はみられない。そして音便率の高い巻では、地の文・会話文なども共に音便率が高く、低い巻では地の文・会話文なども共に低いのである。これは何故であるのか。その理由を充分明

確に示すことは出来ない。偶然の結果として片付けることが出来ないとするれば、何がそうさせたのか。それぞれの巻の性格、記述法など検討すべきかもしれない。ともかく高率の巻と低率の巻とは、このことに關する限り、別人の作のような感じさえする。いつたい当時の他の作品はどうであつたのであろうか。比較的古い写本もあり、文章量も多い『栄花物語』ではどのような状態であるか、対比して考察する必要がある。これは次の機会での課題である。

第三に、冒頭で引用した藤井高尚の説である。今までの調査の結果によると、高尚の説とは合致しないが、平安朝和文に精通した彼の発言が誤りであるとは簡単に言うことは出来ない。とすれば、高尚の主張しているのはどのような音便の用法について言つたものであろうか。再検討する必要がある。そこで、今回の調査方法を改めて振り返ってみると、『源氏物語』全巻にわたつて地の文・会話文・消息文・心中文のそれぞれに出現する形容詞連用形を、音便形・非音便形に分け、音便率を出した。求められた数値を比較したところ、地の文31%、会話文27%、消息文22%、心中文24%となり、消息文の音便率が一番低くなつてしまつたのである。では何故高尚は中古の物語文中の消息文には音便が多いとしたのか。それ

は彼が何もこのような細かい調査を行った上で主張したのではなく、恐らくは中古の散文和文資料を繰り返し読んでいるうちに、感覺的に消息文に音便が多いようにとらえたのだと思われる。実際『源氏物語』中の消息文を特に意識しないで読むと、元々地の文・会話文などに比べ、短かい文章である消息文中に出現する音便というのはとても目立つ。それは非音便形に対して音便形はいくつあるというのではなく、その少ない言語量の中で、音便形が目立つ感じがあるということではなからうか。とすれば、それを説明するために、形容詞の音便形対非音便形という角度からだけではなく、別の面からの観察を試みるべきではなからうか。そしてさらに他の資料とも対比する必要がある。

## 六

以上の結果をまとめると次の通りである。

一、『源氏物語』全巻を通して、地の文・会話文・消息文・心中文の音便率をみると、いずれも約30%であつた。

二、巻毎の音便率にはかなり差があり、高率の巻では約60%、低率の巻では約5%という数値であつた。

三、藤井高尚の説から予想した音便形出現の傾向は見出すことが出来なかったが、これは別の面からの検討を併せ試みる必要があるのではないか。

このように、『源氏物語』全巻にわたって行つた調査によつて、形容詞連用形ウ音便については当初の予想に反して、作者の用語選択意識による音便形の使い分けの有無や出現部分の特徴をはつきりと見出すことは出来なかった。しかし、形容詞連用形ウ音便が和文である『源氏物語』において深く浸透していた様子は伺えたように思われる。はなはだ実り少ない結論ではあるが、今後、新しい資料との比較と別の観点からの検討とを加えて、徐々に事実を確認し、考察を深めていきたい。

#### 注

- (一) 『消息文例』(和泉書院、一九七八)
- (二) 江口正弘氏「中古和文資料における動詞の音便形」『国語と国文学』昭和五〇・五
- (三) 北原保雄氏「形容詞のウ音便」『国語国文』36巻8号

#### 付記

本稿は平成五年十一月十四日の全国大学国語国文学会秋季

大会(同朋大学)において発表したものに訂正を加え、改稿したものです。当日会場で、また、特に後日書面でご懇切にご指導賜りました諸先生に厚く感謝申し上げます。

(博士後期課程二年)